

# 百濟王子豊璋と倭国

高 寛 敏

## はじめに

百濟義慈王子の豊璋は、7世紀末に至る東アジア激動期の幕開けとなった642年頃、来倭し、百濟滅亡後に帰還、百濟復興軍によって新王に推載された。百濟復興軍は、倭軍の支援も受けたが、その甲斐もなく663年に唐・新羅軍に敗れ、豊璋は高句麗滅亡を余儀なくされた。さらに668年の高句麗滅亡に際し、豊璋は唐軍に捕らえられ、遂に唐の流刑の地で生涯を終えることになった。未曾有の激動期に、各国を転々としながら、一連の事件に深く関与した豊璋は、歴史上にも稀な人物であったといえる。それだけに、豊璋の動きを正確に把握することは、当時の東アジア史を解明するうえで重要な意義をもつことになるが、関連史料には矛盾が少なくなく、多くの論議をよんでいる。以下に、先学の業績に学びながら関連史料を検討し、それを通じて当時の国際関係、また倭国の出兵理由について考察することにするが、最も多くの豊璋

関係史料をもつ『日本書記』（以下、書記）がその主要な検討対象となる。

## 1. 皇極紀の翹岐関係記事

豊璋の来倭年については、書記編者によって造作された舒明紀3年(631)条(後述)を除いては、直接の明文がない。しかし、豊璋は書記に引用された高句麗僧道頭の「日本世記」には糺解とされており、それと普通と考えられる翹岐<sup>(1)</sup>については皇極紀に関連史料がある。その一連の史料には矛盾が多く<sup>(2)</sup>、その全般を整合的に解釈してこそ、翹岐来倭年を決定づけることができる。皇極紀の関連記事は以下のとおりである。

- (1) (元年1月29日-642年)「百濟使人大仁阿曇連比羅夫、從筑紫国、乘馱馬來言、百濟国、聞天皇崩、奉遣弔使。臣隋弔使、共到筑紫。而臣望仕於葬。故先独来也。然其国者、今大乱矣。
- (2) (2月2日)「遣阿曇山背連比羅夫・草壁

(1)西本昌弘「豊璋と翹岐」(『ヒストリア』107、1985年)。豊璋と翹岐は同一人物としてよく、また「百濟国主の兒の翹岐」(皇極紀2年4月条)という表現から、豊璋は義慈王子であることが明らかである。鄭孝雲「7世紀代の韓日関係の研究(上)」(『考古歴史学志』5・6、釜山、1990年)、金寿泰「百濟義慈王代の太子冊封」(『百濟研究』23、大田、1992年)、盧重国「七世紀、百濟と倭との関係」(『国史館論叢』52、ソウル、1994年)は、豊璋を武王子(義慈王弟)とするが、史料批

判が充分でなく、従いがたい。詳細は以下に行論する。  
(2)皇極紀・朝鮮関係記事についての初期の研究としては、鈴木靖民「皇極紀朝鮮関係記事の基礎的研究」(『国史学』82~83、1970~71年)、山尾幸久「大化改新直前の政治過程について」(『日本史論叢』1~2、1972~73年)があり、問題点はそれにみな指摘されている。

- 吉士磐金・倭漢書直具、遣百濟弔使所、問彼消息。弔使報言、<sup>(A)</sup>百濟國主謂臣言、塞上恒作惡之。請付還使、天朝不許。百濟弔使倭人等言、<sup>(B1)</sup>去年十一月、大佐平智積卒。又百濟使人、擲崑崙使於海裏。<sup>(B2)</sup>今年正月、國主母薨。又弟王子・兒翹岐及其母妹女子四人、內佐平岐味、有<sup>(A)</sup>高名之人卅余、被放於嶋。
- (3) (2月6日)「高麗使人、泊難波津」。(2月21日)「遣諸大夫難波郡、檢高麗國所貢金銀等、并其獻物。使人貢獻既訖、而諮云、去年六月、弟王子薨。秋九月、大臣伊梨柯須弼弒大王、并殺伊梨渠世斯等百八十余。仍以弟王子兒為王。以己同姓都須流金流為大臣」
- (4) (2月22日)「饗高麗・百濟客於難波郡。詔大臣曰、以津守連大海可使於高麗。以國勝吉士水鷄可使於百濟。草壁吉士真跡可使於新羅。以坂本吉士長兄可使於任那」
- (5) (同2月24日)「召翹岐、安置於阿曇山背連家」
- (6) (2月25日)「饗高麗・百濟客」。(2月27日)「高麗使人、百濟使人、並罷歸」
- (7) (3月6日)「新羅遣駕騰極使与弔喪使」。(3月15日)「新羅使人罷歸」
- (8) (4月8日)「大使翹岐、將其從者拜朝」。(4月10日)「蘇我大臣、於敵傍家、喚百濟翹岐等。親對語話。仍賜良馬一匹、鉄甘鋌。唯不喚塞上」。(5月5日)「於河内國依網屯倉前、召翹岐等、令觀射獵」
- (9) (5月16日)「百濟國調使船与吉士船、俱泊干難波津(分注。蓋吉士前奉使於百濟乎)」。(5月18日)「百濟使人進調。吉士服命」
- (10) (5月21日)「翹岐從者一人死去」。(5月22日)「翹岐兒死去」。(5月24日)「翹岐將其妻子、移於百濟大井家。乃遣人葬兒於石川」
- (11) (7月22日)「饗百濟使人大佐平智積於朝(分注。或本云、百濟使人大佐平智積及兒達率 闕名・

恩率軍善)乃命健兒 相撲於翹岐前。智積等、宴畢而退、拜翹岐門」

- (12) (8月16日)「百濟使・參官等罷歸。仍賜大舶与同船三艘。是日夜半、雷鳴而於西南角、而風雨。參官等所乘船舶、触岸而破」
- (13) (8月13日)「以小德授百濟質達率長福。中客以下、授位一級。賜物各有差」
- (14) (8月15日)「以船賜百濟參官等發遣」
- (15) (8月16日)「高麗使人罷歸」。(8月26日)「百濟・新羅使人罷歸」
- (16) (10月15日)「是日、新羅弔使船与賀騰極使船、泊干壹岐嶋」
- (17) (2年4月21日-643年)「筑紫大宰、馳駢奏曰、百濟國主兒翹岐・弟王子、共調使來」
- (18) (6月13日)「筑紫大宰、馳駢奏曰、高麗遣使來朝。郡卿聞而、相謂之曰、高麗、自己亥年不朝。而今年朝也」
- (19) (6月23日)「遣數大夫於難波郡。檢百濟國調与獻物。於是、大夫問調使曰、所進國調、欠少前例、送大臣物、不改去年所還之色、送群卿物、亦全不將來、皆遣前例。其狀何也。大使達率自斯・副使恩率軍善、俱答諮曰、即今可備。自斯、質達率武子之子也」
- まず、元年記事で二点について確認しておきたい。第一点は、翹岐来倭記事についてである。翹岐の倭での行動は(5)以下に記されており、(8)・(10)・(11)には細かい記録がある。(8)では翹岐は「大使」とされている。翹岐来倭記事は(5)の前であったはずであるが、それは(1)・(2)の「百濟弔使」のことに他ならない。(1)に翹岐の名がなく、ただ「弔使」とされた理由については後述する。第二点は、その後の百濟・倭の動きについてである。翹岐来倭を受けて、(4)で国勝吉士水鷄が百濟に派遣されているが、その帰国記事が(9)（「吉士船」）、(9)に吉士とともに来た「百濟調使」が(11)の「百濟使人大佐平智積」である。

智積の帰国記事は(12)であるが、そこに「百済使・参官等」となっているのは、百済使の智積はこの時無事に帰国したが、参官の乗船だけが壊れ、(14)で改めて参官が帰国したということを表示している<sup>(3)</sup>。以上の記事は年月は別としても、一連の記事で同一原本に基づいている。

皇極元年・2年条には重出記事が多い。(1)・(2)で翹岐が来倭したことになるが、(17)も翹岐来倭記事である。(3)に高句麗使節来倭記事があるが、(18)にもあり、しかも(18)の「高麗、自己亥年(639、舒明11)不朝」は(3)を否定している。そのうえ(3)の高句麗使節帰国記事は(6)・(15)に重出している。また(7)の新羅「賀騰極使与弔喪使」は、(16)の「新羅弔使船与賀騰極使船」とも重出している。このことは、(1)~(19)には二種の原本が存在し、それを編者が無批判に配列した結果といえる。

一般的に年次は2年条が正しい。その理由の第一は、(3)で高句麗使節が去年(641年)秋9月に起こった伊犁柯須弥(湖盖素文)の政変について伝えているが、それは642年秋が正しく、(3)は一年程繰り上がっているからである。理由の第二は、(16)のように大宰府での記録としかいようなない記事があるが、大宰府が介在する(17)・(18)もそう考えられること、そして大宰府の

記録は信頼しうる実録と考えられることである<sup>(4)</sup>。翹岐は2年4月に、高句麗使節は2年6月に筑紫に到着したのであって、元年条の記事は(16)を除くと年次が一年程繰り上がっているのである<sup>(5)</sup>。

元年条の原本は、(11)の分注に引用された「或本」であろう。この「或本」は、翹岐の児や従者の死去などのことを記していることからみて、来倭当初の翹岐の倭人付人が記録したものらしい。その付人とは、(2)で筑紫に派遣されて翹岐らに会った三人中の、草壁吉士磐金か倭漢書直県であろう<sup>(6)</sup>。この「或本」の記事を一年程繰り上げ、皇極元年条に配したのは稿本の段階である。次の完成者は、稿本を尊重してそのまま採用したが、新たに大宰府の記録を得て、かつ(1)・(2)に翹岐の名がないことなどもあって、それをその年次どおりに挿入した。ここに前後が矛盾、重出する理由があったのである。

ここでまだ史料系統の曖昧な(19)について考える。(19)に「去年所還之色」とあるが、この一文は、元年条に百済使節の来倭があったのを受けている。(19)が「去年」のこととしているのは、舞台が両方とも難波であることから、(9)のことを考えられる。(9)と(19)は同一原本に基づき、実年次は(9)が皇極2年、(19)が3年のことであ

(3) 鈴木英夫「大化改新直前の倭国と百済」(『続日本紀研究』272、1990年)

(4) 山尾幸久「六四〇年代の東アジアとヤマト国家」(『青丘学術論叢』2、1992年)。この論文は注(1)同氏論文の改稿とすべきものであるから、以下の山尾説はこれによる。(17)・(18)は筑紫大宰からの通報をヤマトで聞いたことになっているが、それは本文完成者の書き換えであろう。両記事は「筑紫大宰、馳駅奏曰」と同文になっていることが、それを暗示する。(18)の「群卿」もそれに属するであろう。

(5) 渡辺康一「百済王子豊璋の来朝目的」(『国史学研究』19、1993年)は、大宰府関係の記録は具体性がなく信頼できないとし、(1)で阿曇連比羅夫は元年12月に行わ

れた舒明大葬に参加するために入京したとあるから、比羅夫の帰国、豊璋の来倭はやはり元年初のこととする。しかし後述のように、(1)は史料的に問題があり、年次はやはり2年とするのが正しい。

(6) 鈴木靖民注(2)論文は、翹岐に関係ある百済系氏族の記録、あるいは阿曇氏家記を想定する。後述のように、斉明紀・天智紀に原典として用いられた阿曇氏家記は、翹岐を豊璋、阿曇連比羅夫を阿曇比羅夫連としているので、「或本」は少なくとも阿曇氏家記ではない。「或本」は、三人の最後に挙名された倭漢書直県の記録とするのが、最もふさわしいと考えられるが、あるいは公的記録をも加えて一本に整理されたものであるかもしれない。

る<sup>(7)</sup>。(19)には「大使達率自斯、副使恩率軍善」とあるが、軍善は(11)で智積とともに来倭しているから、(19)では2度目である。(9)と(19)は話の内容も通じ、人名表記も一致する。さらに(19)では、「自斯、質達率武子之子也」とあるが、この質の武子は、(13)の「百済質達率長福」とともに翹岐に随従した人物と考えられるので、(19)も翹岐周辺の情報、つまり「或本」によると考えてよいのである。

稿本は、2年4月に筑紫に到着した翹岐関係の「或本」記事を元年正月に配した。その理由は、翹岐ら百済の高級使節団を皇極即位直後に来た最初の「弔使」とするためであったと考えられるが、そのことを証明するためには(1)を批判的に検討する必要がある。

翹岐来倭の様子は、(17)にあるように、翹岐を大使とする百済使節団が2年4月に到着し、その報に接した倭王権が阿曇山背連比羅夫らを迎接使として筑紫に派遣したというのが事実であろう。(1)の記すように、比羅夫が百済から翹岐らを伴って帰国したとするなら、わざわざ比羅夫を百済の「消息」を問いに再度、筑紫に派遣するなどということはなかったのである。(1)には疑問があり、それは稿本の造作文であると推測される。

(1)が稿本の造作文であることは、(1)の「百済使人大仁阿曇連比羅夫」によってもわかる。(11)の「百済使人大佐平智積」によれば、「或本」の「百済使人」は百済から来た使節の意であるが、(1)では倭から百済に派遣された使節の意となって、逆である。それは「或本」の用法ではないのである。また(1)の阿曇連比羅夫は、(2)の阿曇山背連比羅夫の略記である。(1)は(2)を参考にした造文なのである。もちろん(1)の「大仁」

は(2)以下にみえないが、それは「或本」にあったものを参考にしたか、適当な添加とみることが可能であろう。(1)は稿本の造作文であって、「其国者、今大乱矣」とあるのも、(3)を参考にした造文とみてよいのである。

(1)には明らかに阿曇氏顕彰の意味が含まれているので、稿本の執筆者は阿曇氏関係の人物と考えられる。つまり稿本は、比羅夫が皇極即位直後に百済弔使を帯同して帰国したばかりか、舒明大葬に間に合うよう、独り馭馬に乗って馳せ参じ、いち早く百済「大乱」の情報をも伝えたとしたのであろう。その際、(2)の「百済弔使兼人」の言に翹岐らが嶋に放たれたとあったので、翹岐来倭をその跡とし、(1)・(2)から翹岐の名を削ったのであろう。

稿本は、これ以外にも「或本」に大幅な操作を加えている。まず、筑紫の記録によると、新羅使節が元年10月、翹岐らの百済使節が2年4月、高句麗使節が2年6月の順に、筑紫に到着している。ところが稿本記事では、(1)・(2)に翹岐らの百済使節、(3)に高句麗、(7)に新羅使節とあって、順序が異なる。それはやはり稿本が百済使節を最初の正月に配したところに根本的な原因があるが、高句麗使節をそれに次ぐ2月としたのにも、それなりの意図があったといえる。

(3)で高句麗使節は、伊犁柯須弥が大王以下、180余人の貴族を殺したことを伝えているが、これは高句麗使節の言葉とは考え難い。高句麗使節としては、旧王の死と新王の即位のことは伝えたはずであるが、内部の生々しい権力闘争のことを外国に知らせるとは思われず、従ってこの情報を伝えたのは翹岐らであろう。(2)・(3)にみえる「弟王子(王弟)」という特異な語は、その筆録者、あるいは情報提供者が同一人物で

(7)山尾幸久注(4)論文

あったことを示唆している。この話が(17)にもみえるのは、それが筑紫での同一時の筆録であったことを証左する。稿本は、百済使節からの情報を高句麗使節の言葉と書き変え、それに辻褃を合わせるため、正月の百済使節に続いての、2月の高句麗使節来倭としたのである。稿本がそうしたのは、それが「弔使」の言葉としてはふさわしくないと判断したからであろう。

(7)で新羅使節が3月に来たとあるのも、正月の百済、2月の高句麗に次ぐ、3月の新羅という意味での操作であろう。事実上、新羅使節が最初に来たのであって、それは元年10月のことなのである。

(2)の「弔使報言」、「百済弔使倭人等」の内容(A)・(B)も改変されている。後述のように、翹岐は重大な使命を帯びて来倭したのであり、その関連記事は「或本」にあったのであるが、(A)はそれについては黙している。それは稿本が翹岐らを「弔使」と改変したと関連して、「或本」の記事を採用しなかったからである。そのため、翹岐の言葉として記すことができなくなり、窮余の策として、(8)の5月5日記事「唯不喚塞上」をヒントに、塞上が悪者であるような(A)を造文したのでであろう。「還使」とは比羅夫を指すが、百済からの還使の比羅夫とは、「百済使人」と関連した稿本の造作になることが既に明らかである。

(B1)も不可解な記事であるが、「百済使人(比羅夫)」云々とあるからには、やはりそれは稿本の造作文である。「大佐平智積卒」は(11)と矛盾するが、それは(B2)の構文にならって、

また「大乱」を印象づける目的もあって、(11)を参考にしながら、事実ではない、倭人の風評としてそれを造文したと考えられるのである。

結局、(A)・(B)で「或本」に典拠をもつのは、(B2)だけである。それによれば、倭人たちの間で、王弟と王子翹岐以下、高名人40余人が嶋に放たれたという風評がたったことになる。それは百済でなんらかの権力闘争が起こって、40余人が放逐され、そのうち翹岐らの一行は筑紫に放たれたということであろう<sup>(8)</sup>。翹岐らが倭に放逐されたような風評がたったので、(15)で大佐平智積が来倭し、「翹岐門」を「拜」してその風評をうち消したのである<sup>(9)</sup>。

百済大使の智積は、(9)で吉士船とともに来着した。その百済使船を(9)は「調使船」とし、「百済使人進調」としている。智積来倭の目的からしても、「或本」が智積を「調使」としていたとは考えられず、そう表現したのも稿本であろう。(9)は(19)と、(19)の「去年」で連続していて、(19)にも「百済国調」や「調使」の語がみえるが、それらも同様でなければならない。ただし百済からの贈答品をめぐって、倭が不満を示したことは事実のようであるが、それについては後述する。

(17)の「共調使」は、本来無関係な(17)と(19)を一連のものとして把握した完成者の付会である。一連の記事には完成者の手も加わっているのである。三国の使節の帰国記事が(6)・(7)と(15)で重出しているのは、どちらかの稿本記事に気付かなかった完成者が、適当に造文したものとしか説明の施しようがない<sup>(10)</sup>。また(4)で、高句麗・百済・

(8)鈴木英夫注(3)論文は、「被放於嶋」を「倭国ないし筑紫への派遣をさすとも解釈できる」とするが、そうすれば40余人がみな来倭したことになる。それでは普通名詞としての「嶋」が生かされないのではないだろうか。

(9)鈴木英夫注(3)論文。鈴木氏は(3)で「智積卒」の風

評がたったので、それを否定するためもあって智積が来たとするが、王子の政治生命を保証するためには、大佐平級の人物が要求されたとも解釈できよう。

(10)山尾幸久注(4)論文は、(15)を筑紫の記録として、高句麗使人については(18)にある「己亥年」の使節、百済・新羅使人については、舒明紀12年(640)10月条の「百

新羅・任那にも1名ずつの使者を派遣したとあるのも、「任那」が完成者の付会であるから(後述)、それには完成者の改変があるのであって、「或本」では高句麗・百済に2名ずつを派遣したとあったのであろう。倭王権の使者派遣は高句麗・百済での新事態に関連しているのだから、新羅への派遣はもともと不必要であったのである。

## 2. 舒明紀・皇極紀の豊璋関係記事

百済義慈王2年(642)、百済は大耶城をはじめとする40余城を新羅から一挙に攻取した。この40余城とは洛東江西岸一帯を指すもので、それは新羅による加耶諸国統合以来の戦局の大転換であり、百済の大勝利であった。643年4月に筑紫に到着した翹岐ら一行が、その詳細な情報を伝えたことは当然のことであり、またその来倭目的もそれに関連したものであったろうことは容易に推察される。(2)はこの事件について沈黙を守っているが、もともと「或本」にはその記録があったと考えられる。それが無いのは、稿本が翹岐らを「弔使」として、それにそぐわないこの情報記事を採用しなかったからであるが、完成者もまたある理由によって、やはり採用しなかったのである。

(20) (孝徳大化元年秋7月-645) 高麗・百済・新羅、並遣使進調。(A) 百済調使、兼領任那使、進任那調。唯百済大使佐平縁福、遇病留津館、而不入於京。巨勢徳太臣、詔於高麗使曰、(中略)。又詔於百済使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百済国、為内

官家、譬如三絞之綱。(B) 中間以任那国、属賜百済。後遣三輪栗隈君東人、觀察任那国塚。是故、百済王随勅、悉示其塚而調有闕。由是、却還其調。任那国所出物者、天皇之所明覽。夫自今以後、可具題国与所出調。汝佐平等、不易面来。早須明報。(C) 今重遣三輪君東人・馬飼造(分注。闕名)。又勅、可送遣鬼部達率意斯妻子等。

(20)で三国進調や、「明神御宇日本天皇詔旨」と宣明体詔書の形式を備えた高麗使人への詔(中略部分)、同形式の百済使人への詔の一部は、編者の完全な舞文であるから<sup>(11)</sup>、検討すべきは傍線部分である。まず(B)の「中国以任那国、属賜百済」は、完成者の造作文である<sup>(12)</sup>が、それは百済の洛東江西岸一帯占領を念頭にしたものなのである。間違いなく完成者はこれに関する史料を実見していたのであるが、それは翹岐の報告以外にはありえない。完成者は「或本」のこの記事を実見したのであるが、それを天皇が「任那国」を百済に「属賜」したと歪曲したため、それと矛盾する「或本」記事を採録しなかったのである。そして完成者は、この「属賜」を起点にして、それ以前に「任那国」が天皇の庇護の下に存在し続けていたとしながら、実際の「任那」(任那加羅を除く加耶諸国を意味する語で、書記編者の造語)領有者である百済か新羅が、「任那の調」を進調し、そうでなければ貢質するという構想をたてたのである。(A)の「兼領任那使、進任那調」は、まさしく百済が「任那国」を「属賜」されると同時に、「任那調」を貢上するようになったと語っており、それまでは、

百済・新羅朝貢之使、共從來之」の使節が、(15)の642年8月に筑紫から解纜したとする。しかしこれは、山尾氏自身が「長期の滞在に不自然な感も残る」と告白しているように、不自然で論拠も薄弱である。

(11) 山尾幸久注(4)論文

(12) 拙稿「〈任那〉の滅亡と〈任那の調〉(『東アジア研究』7、1994年

㉑) (舒明紀3年3月条-631) 百済王義慈入王子豊章為質。

とあるとおり、豊章を入質していたとしていたのである。義慈王の即位が641年であるから、この記事は繰り上がっているのであるが、それに完成者がその構想に合わせて操作した結果である<sup>(13)</sup>。

豊章来倭は641年以後で、それに関する史料は他にあったはずであるが、後述のように、それは齊明紀・天智紀で参照された阿曇氏家記である。そこで注目されるのが、次の記事である。

㉒) (皇極紀2年是歲条-643) 百済太子余豊、

以密蜂房四枚、放養於三輪山、而終不蕃息。

余豊とは豊璋のことであるが、豊璋の私的行動を伝えるこの記事は、以後の豊璋・糺解記事が歴史的イベントを伝えるのとは異質であり、一連の翹岐関係記事と共通する。㉒は稿本段階までは同年の日付の加わった翹岐記事であろうと思われる。完成者の手許には、大宰府関係の643年翹岐来倭史料と阿曇氏家記の同年豊璋来倭史料があった。そこで完成者は翹岐と豊璋を同一人物とみなし、㉒の翹岐記事を余豊記事としたことが考えられる。㉒が是歲条となっているのは、二史料を組み合わせた結果に他ならないであろう。豊璋と翹岐はやはり同一人物で、その来倭年は643年のことなのである。しかし一方、完成者は豊璋と翹岐を別人物として扱い、豊璋来倭年を舒明3年とする記事をつくり、㉑の「属賜」以前の貢質記事としたのである。ただ㉑と㉒の間には、「余豊璋」(齊明紀6年冬10月条)を「王子豊章」、「太子余豊」とする相違が

あるが、それは造作や書き換えの際の完成者のミスや心理的要因になるものといえるのではなからうか。「太子」の語を根拠にして、義慈王代初期の王位継承をめぐる政変を想定する考えもあるが<sup>(14)</sup>、それには慎重さが要求されるであろう。豊璋が「質」とされたことに伴い、翹岐集団の達率長福・達率武士も「質」とされたに違いない。また「属賜」は本来は(2)の翹岐にかけられるべきものであるが、(2)は年次が1年繰り上げられ、そのうえ翹岐は「弔使」とされたので、そうはいかず、㉑の百済大使縁福にかけられたのである。

㉑の(B)・(C)にはまだ問題がある。(B)では「属賜」を受けて「遣三輪栗隈君東人、觀察任那国堺」となり、通説では、東人は(4)の坂本吉士長兄と同行したとするのであるが、「任那国界」が完成者の造語であるから、そう簡単には事実化できない。「属賜」と「觀察」の関係は、書記編者の造作文のパターンなのである<sup>(15)</sup>。(B)は全て造作文と考えるのが無難で、(A)の佐平縁福の来倭を受けて、(C)の三輪栗隈君東人と馬飼造の派遣が決定されたというにとどめるべきであろう。佐平縁福は唐太宗の高句麗遠征に関する情報を伝えたのであるが<sup>(16)</sup>、東人らの派遣はそれに関係するのである。むしろ注目すべきは、(B)の「調有闕、由是、却還其調」は(19)を受けており、そうすると完成者は「属賜」を(2)の翹岐の時とみていたことがわかることである。「或本」にはやはりそれに関する史料があったのである。

以上で、豊璋は643年4月に筑紫に到着し、

(13) 注(12)拙稿

(14) 山尾幸久注(4)論文。鈴木靖民「7世紀中葉、百済の政変と東アジア」(忠南大学校百済研究所『百済史の比較研究』大田、1993年)

(15) 拙稿『日本書紀』所引〈百済本記〉に関する研究

(在日本朝鮮社会科協同会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年)。仁徳紀41年春3月条・縦体紀3年春2月条・同6年2月条などがそれに属する。

(16) 山尾幸久注(4)論文

642年の百済による洛東江西岸一帯の占領と高句麗の政変を倭王権に伝えたことが明らかとなった。豊璋の来倭目的は、この激変した新情勢に関することであったことに疑問はない。豊璋が高句麗の政変を伝えたのも、単に情報提供ということではなかったに違いない。政変直前の642年8月、百済は高句麗に、新羅の党項城を攻めて新羅の入唐路を断つことを提起した。淵蓋素文はその直後に政変を起こして、対唐妥協派の栄留王一派を処断し、百済と結んで対唐強硬路線を歩んだ。『旧唐書』新羅伝・貞観17年（643）条の新羅使上言に、「両国連兵、意在滅社稷」とあるのは、その間の事情を物語るものである。つまり豊璋は、百済の洛東江沿岸進出とともに、百済・高句麗の対新羅軍事同盟の成立を伝えたのであろう。そして単なる情報伝達に来倭したわけではなからうから、この機会をとらえて旧任那加羅方面への共同出兵を提議したと考えられる。旧任那加羅の復建・確保こそ、百済・倭の歴年の共通課題であったからである<sup>(17)</sup>。

ところが、倭政権はそれに直ちに同意することはなかった。なぜなら610年以後、新羅と倭間の旧任那加羅四邑をめぐる懸案が一段落し、両国間に友好関係が成立していたからである<sup>(18)</sup>。そして倭の入唐路は新羅によって保証されていたのである。またかつて敵対していた高句麗とも、570年（舒明7）の高句麗使節来倭以来、友好関係が成立し、それは高句麗滅亡まで続いた。倭国はもともと朝鮮半島への領土的野心があったわけではなく、朝鮮諸国や中国王朝との往来・交易が円滑に進めばそれでよかったのである。それは7世紀前半以後、最も理想

的な形で実現され、倭国は朝鮮三国と隋・唐との友好関係を通じて、古代文化を著しく発展させたのである。倭には最早、旧任那加羅をめぐる、ことさら事を構える必要はなかったのである。そのような倭の消極的態度が(19)にあるように、「百済調」を2度にわたって返却するという点に示されたのである。(19)には「欠少前例」、「送大臣物」、「送群卿物」、「違前例」などの語がみえるが、それらが原本のものとは確言できない。敏達紀4月2日条「百済遣使進調。多益恒歳」、同6月条「新羅遣使進調。多益常例」など、そのような筆法は随所にみられるのである。確かなことは、倭が百済からのなんらかの贈答品を拒否したということであるが、この贈答品とは旧任那加羅出兵と関係するといえるであろう。

新羅が唐と同盟し、倭を見限ったのは657年（斉明3）のことである。新羅は従来の方針を転換し、倭の入唐の仲介を拒否し、倭への遣使を絶ったのである<sup>(19)</sup>。その徴候は少し前からあった。即ち、651年（白雉2）、新羅使節が唐服を着服して筑紫に来着したので、倭王権はそれを追還したという事件が起こった。それは新羅が唐の権威を借りて、新羅・倭間の軍事同盟を迫ったのに対し、倭王権が衝撃を受け、かつ反発したことを示すものである。

『三国史記』百済義慈王紀12年（652）条に「与倭国通好」と特筆されたように、以後、倭は百済への傾斜を強めた。だからといって、倭が唐・新羅と軍事的に対決しようとしたのではないことは、659年にも遣唐使を派遣していることで推測される。倭王権としては、新羅とた

(17) 山尾幸久注(4)論文は、豊璋は「少なくとも、旧伽倻地域の維持に関する、外交上の反新羅の国家的姿勢、対新羅の軍事的支援」を求めたとするが、「旧伽倻地域の維持」という消極的なものとは考えられない。

(18) 延敏洙「日本書紀の〈任那の調〉関係記事の検討」(『九州史学』105、1992年)

(19) 鈴木英夫「七世紀中葉における新羅の対倭外交」(『国学院雑誌』883、1980年)



たかう理由はないが、さりとて反百済の立場はそれ以上にとれなかったということであろう<sup>(20)</sup>。そしてそこには、高句麗が健在である以上、唐の百済出兵やそれによる百済滅亡という事態はありえない、という判断が根底にあったはずである。しかし、唐・新羅軍が百済を攻撃するという事態に至っては、倭は否応なく、反唐・新羅の立場に立たされてしまったのである。

このような情勢の下で、豊璋の倭国滞留はいきおい長期化した。かつて任那加羅への倭軍出兵を求めて来倭した蕃酋王弟昆支は、15年程も滞在していたから、それは特別異なることでもなかったのである。情勢は刻々変化していたからなおさらである。倭国には有力な百済系氏族や集団が存在したから、長期滞在の経済的支障もなかったに違いない。豊璋は「百済君」（孝徳白雉元年2月条）として、倭政権でも厚遇されていた。豊璋は「大使」として来倭したのであって、決して「質」ではなかったのである<sup>(21)</sup>。

しかし一方、豊璋は叔父の忠勝、弟の塞上（白雉元年2月条）や達率長福・達率武子を連れていたばかりか、妻子をも帯同していた。それは初めから長期滞在を予測してのことであったのである。その点、やはり翹岐は放逐されたという風評は無視できないものがある。豊璋来倭後、百済では隆が太子に冊立されていることからして、豊璋や忠勝は権力闘争に破れ、中央

政権から遠ざけられたとみることは<sup>(22)</sup>、根拠あることと考えられる。

### 3. 百済復興運動と豊璋

660年、唐・新羅連合軍が百済に侵攻した。唐の蘇定方が13万の軍を率いて徳物島（牙山湾西方の徳積島）で新羅太子の法敏と会い、軍期を約したのは6月21日のことである。それからわずか一週間足らずの戦闘で義慈王が降服したのが7月18日、義慈王と太子隆、その他の王子や重臣らが蘇定方に連行され、東都（洛陽）の高宗の前で膝を屈したのが11月1日である。

倭国にとっては、これは衝撃的な事件であったに違いない。唐が百済に出兵したこともそうであるが、百済があっけなく滅亡したことは、その衝撃を倍加したことであろう。ただ幸いに、百済では直ちに遺民たちの復興軍が活躍し、その勢いが大いに奮ったことである。白村江戦に至るまでの過程を記したのは齊明紀・天智紀であるが、それは複数の原本に基づいているので、以下にまずはその原本を追及することにする。

原本の1本であったことが確かなのは、高句麗僧道頭が著した「日本世記」（以下、「世記」）であるが、その関連記事としては、分注を含めて13条と考えられている<sup>(23)</sup>。次に当面必要なものだけを提示する。

(20) 山尾幸久注(4)論文は、「656年頃、ヤマトは高句麗・百済の国家的軍事同盟に急接近し、これと結びついた、「ヤマトの場合東アジアの国家ブロックに加担し始めたのは656年頃から」とするが、鬼頭清明「七世紀後半の東アジアと日本」（同『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房、1976年）は、「百済が滅亡する直前まで日本は、唐・新唐との決定的な対立を、それが予想されたものであるにせよ、できるだけ回避してきた」とする。私見では、倭は百済より立ったが、かといって新羅と軍事的に対決しようとしたものではなかったのである。

(21) 『三国史記』義慈王後紀に、福信らが「古王子扶餘

豊嘗質於倭国者」を迎えて王に推載したとし、扶餘豊は質であったとするが、それは『三国史記』編者の潤色である。これについては注(12)拙稿参照。

(22) 山尾幸久注(4)論文

(23) 日本古典文学大系『日本書紀』下、岩波書店、1965年、358・578・582ページ。なお「世記」について、八木充「百済の役と民衆」（小葉田淳教授退官記念事業会編『国史論集』1970年）は、道頭が倭国において、「当時の国内記録および役を体験して渡来した朝鮮人からの情報を主要な材料にして」筆録したとするが、従うべきであろう。「日本」の語からすると、その編纂は8世紀初であろう。

- ①（斉明紀6年秋7月条分注-660）高麗沙門道頭日本世記曰、七月云々。春秋智、借大將軍蘇定方之手、挾擊百濟亡之。或曰、百濟自亡。由君大夫人妖女之無道、擅奮国柄、誅殺賢良故、召斯禍矣。可不慎歟。々々々々。其注云、新羅春秋智、不得願於内臣蓋金。故亦使於唐、捨俗衣冠、請媚於天子、投禍於隣国、而構斯意行者也。
- ②（斉明紀7年夏4月条-661）百濟福信、遣使上表、乞迎其王子糺解（分注。釈道頭日本世記曰、百濟福信獻書。祈其君糺解於東朝）。
- ③（天智即位前紀7月是月条-661）蘇將軍与突厥王子契苾加力等、水陸二路、至于高麗城下。
- ④（斉明紀7年11月条分注-661）日本世記云、十一月、福信所獲唐人統守言等、至于筑紫。
- ⑤（天智即位前紀12月条-661）高麗言、惟十二月、於高麗国、寒極沮凍。故唐軍、雲車衝棚、鼓鉦吼然。高麗士卒、膽勇雄壯。故更取唐二壘。唯有二塞。亦備夜取之計。唐兵抱膝而哭。銳鈍力竭、而不能拔。噬臍之恥、非此而何（分注。釈道頭云、春秋之志、正起于高麗。而先声百濟。々々近侵甚苦急。故爾也）。
- ⑥（天智即位前紀是歲条-661）日本救高麗軍将等、泊于百濟加巴利浜、而燃火焉。灰變為孔、有細響。如鳴鐘。或曰、高麗・百濟終亡之徵乎。
- ⑦（天智紀元年3月是月条-662）唐人・新羅人伐高麗。々々乞救国家。仍遣軍将、拋䟽留城。由是、唐人不得略其南堺、新羅不獲輸其西壘。
- ⑧（天智紀元年夏4月条-662）鼠産於馬尾。釈道頭占曰、北国之人、将付南国。蓋高麗破、而属日本乎。

- ⑨（天智紀2年夏5月条-663）犬上君（分注。闕名）馳、告兵事於高麗而還。見糺解於石城。糺解仍語福信之罪。

これら一連の記事で、分注引用文は「世記」の原文どおりであろうが、引用文でない本文記事は必ずしもそうではない。例えば、②の本文記事は、「糺解」（豊璋）の表記により、「世記」を参考にしたものであることがわかるが、その文章表現は変えられている。原文を改めながらそれを分注に引用するという、一見不可解な現象は、本人執筆者と付注者（完成者）が別人であることを示している。つまり、「世記」を参考にして本文が書かれた（稿本）後、別人によって「世記」引用の分注が付されたのである。一連の記事によれば、「世記」は記事を年月にかけていたと思われるが、⑥だけは「是歳」とあって、そうでない。山尾幸久氏は⑥を糺解が倭を發って、䟽留城（周留城）に至る途中の「世記」の記事と解し、糺解出發年を661年とする<sup>(24)</sup>。

確かに、⑤・⑥・⑦は高句麗・百濟二国にかけての記事であるから、それは一連の「世記」に基づく記事であろうが、しかし⑥の場合「是歳」の意味を解かなければ、それは鉄案とはいえない。

「世記」は、②で福信が倭滞在中の糺解を迎えたいといってきたとし、⑨で百濟での糺解のことを述べているから、糺解が倭を發ち、百濟に帰ったという記事をもっていたのであり、⑦の「拋䟽留城」によれば、䟽留城入城のことをも語っていたのである。それが本文にも分注にも採用されなかったのは、他のより重要な原本の所伝と内容が一致していたからであろう。

⑦は、唐・新羅軍撤退を受けての、道頭による事件の総括である。年月は後半の、「由是」

(24) 山尾幸久『古代の日朝関係』塙書房、1989年、403～

422ページ。以下の山尾説はみなこれによる。

以下の結論部分にかかるのであって、前半の下線部分は「抛疏留城」によれば糺解らの出発記事ともなっている。その「唐人…伐高麗」は「世記」では③に当たるから、③の事態を受けて「高麗乞救国家、仍遣軍将」となる。③に続けて年月を明示した糺解出発記事があったことになる。そしてそれに、途中で⑥の百済加巴利浜記事と疏留城入城記事が、一文として続いていたのであろう。⑥には月次が記されていないので、「是歳」条として処理されたのであるが、「是歳」(661年)は厳密には糺解出発年を指すのであって、より詳しくは③の7月以後ということになる。

もちろん、⑦の「新羅人」には少し問題がある。新羅人が高句麗と直接に戦ったのは、金庾信らが662年正月から2月にかけて平壤に軍糧を輸送した時であるからである。しかし唐から新羅に出兵の指令が届けられたのは661年6月、8月には文武王親率下の新羅軍が北上を開始し、9月には甕山城・雨述城(いずれも忠南大徳郡懐徳面)の百済軍を撃破して、11月には南川州(京畿道利川郡)に至っている<sup>(25)</sup>。⑦は戦後の総括文であるから、このような「新羅人」の軍事行動が「唐人」と一括されたのであって、「新羅人」を基準として時期を考える必要はない。「世記」は糺解出発年を661年としていたのであって、それも7月以後のこととしていたのである。

糺解出発記事に関しては「高麗乞救国家」にも注意される。山尾氏はこれによって、糺解と「日本軍将」の派遣は高句麗の働きかけによるものと解釈するのであるが、果たしてどうであろうか。百済軍が甕山城・雨述城で北上中の新羅軍と戦闘を交えたことからすると、高句麗と

百済軍は連けいを保っていたと考えることもできるが、35万の唐軍を相手に生死存亡をかけて戦っていた高句麗が、例えそれが唐を牽制する意味があったとしても、百済復興軍のためにそのようなことまで容喙したとも思われない。道頭は百済支援軍である倭軍を高句麗支援軍と主観的に考えており(⑥の「日本救高麗軍将等」など)、⑤の分注では山尾氏が解釈するように、倭軍が百済の復興にかかずらっていたことを批判している。このような認識は事実とは距った、あまりにも主観的なものであろうから、「高麗乞救国家」も同様のものとする余地がある。高句麗・倭の共同の軍事行動は、やはり豊璋帰国後のこととするのが妥当であろう。

それでは倭はなぜこの時期に百済支援軍を派遣したのかであるが、それには他の記事をも合わせて総合的に考察する必要がある。

「世記」以外の原本は、一般に「或本」とされている。これについては次の一群の記事が参考になる。

⑩(齊明紀6年冬10月条-660)百済佐平鬼室福信・遣佐平貴智等、来献唐俘一百余人。今美濃国不破・片県、二郡唐人等也。(下略)。

⑪(齊明紀7年11月条分注-661)日本世記云、十一月、福信所獲唐人統守言等至干筑紫。或本云、辛酉年(661)、百済佐平福信所献唐俘一百六口、居干近江国墾田。庚申年(660)、既云福信、献唐俘。故、今存注。

⑫(天智紀2年2月是月条-663)佐平福信、上送唐俘統守言等。

これらはみな福信が献じた唐俘関係記事で、⑩の「庚申年」云々は⑩のことを指している。そうすると、そのことを660年10月とする⑩、661年11月とする「世記」、661年とだけする⑪

(25)池内宏「百済滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の關係」(同『満鮮史研究』上世第2・吉川弘文館、1960

年)

の「或本」、663年2月とする⑫の4記事となる。ところが「世記」と⑫は唐俘を「統守言等」としていること、「世記」と「或本」は同じく661年としていること、⑩は「唐俘一百余人」、「或本」は「唐俘一百六口」として人数が一致することから、これらはみな同一事実の重出記事で、関連原本が4本あったことを推測させる。

もちろん、⑩はその唐俘を「今美濃国不破・片県、二郡唐人等也」とし、「或本」は「居于近江国壘田」として異なる。それは分離、移動などの可能性も考えられるか、それよりも『釈日本紀』所引私記の引く「調連淡海・安斗宿祢智徳等日記」に、天武が美濃国不破郡で「唐人等」に戦術を問うたとあるので、⑩の一文はそれらの日記類を参考にした書記編者の、それも本文であるからして稿本の造文で、美濃の唐人らが必ずしもこの時の唐俘ということにはならない。⑩と「或本」の記事はやはり同一事実を指すのである。したがって、百済復興軍について記した原本は、「世記」以外に3本あったのである。

3本のうち1本は比較的容易に想像がつく。天智紀元年冬12月条から2年9月条までの、百済での豊璋・福信などの活動と白村江戦に関する記事は、一部を除くと、周留城を州柔城と表記した、朴市田来津の百済での活躍を中心として叙述した、朴市氏所伝のようなものを原本としているのである<sup>(26)</sup>。⑫は年次からみて、この朴市氏所伝を原本としていると推測されるが、朴市(朴市秦)氏は代々の郡司を務めた近江国愛智郡の豪族であるから<sup>(27)</sup>、「近江国壘田」の唐人の来歴を知る立場にあり、その来倭年を田

来津活動期にかけたのであろう。

残りの二本については、豊璋帰国と倭軍派遣に関する次の記事が参考になる。

⑬(天智即位前紀8月条-661) 遣前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣等、後將軍大花下阿部引田比羅夫臣・大山下物部連熊・大山上守君大石等、救於百濟。仍送兵仗・五穀(分注。或本、統此末云、別使大山下狹井連檜柳・小山下秦造田来津、守護百濟)。

⑭(同9月条) 皇太子御長津宮。以織冠授於百濟王子豊璋。復以多臣蔣敷之妹妻之焉。乃遣大山下狹井連檜柳・小山下秦造田来津、率軍五千余、衛送於本郷。於是、豊璋入国之時、福信迎來、稽首奉国朝政、皆悉委焉。

⑮(天智紀元年5月条-662) 大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、率船師一百七十艘、送豊璋等於百濟国、宣勅、以豊璋等使繼其位。又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵祿。于時、豊璋等与福信、稽首受勅、衆為流涕。

⑯(天智紀2年3月条-663) 遣前將軍上毛野稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣詵語・三輪君根麻呂、後將軍阿部引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄、率二万七千人、打新羅。

これら一連の記事には矛盾点が少なくないが、特に⑬の前將軍大花下阿曇比羅夫連が、⑮では大將軍大錦中阿曇比羅夫連となって異なるのが注目される。⑬と⑮は原本が異なり、將軍名を列記し、朴市氏所伝の朴市田来津を秦造田来津とした⑬は、公的記録を整理した本(A本)、阿曇比羅夫連の個人的活躍記事で、潤色の甚しい⑮は、阿曇氏家記(B本)を原本とすると考えられる<sup>(28)</sup>。

(26) 鬼頭清明『白村江』教育社、1981年、147ページ

(27) 平岡定海「近江国愛智郡司依智秦公氏について」

(小葉田淳教授退官記念事業会編『国史論集』1970年)

(28) 坂本太郎「天智紀の史料批判」(『坂本太郎著作集』

2、吉川弘文館、1988年)。⑮の「大將軍」は令制の用語、「大錦中」は天智三年制冠位であるばかりか、その内容は極度に誇張、潤色されている。

⑬の分注には「或本」が引用されているが、「統比末云」からすると、原本では本文と分注「或本」記事が一続きであったのである。ところが「別使」の名が⑭の衛送使と完全に一致するので、記事としては重出すると考えた稿本が「別使」記事を削除したということになる。人名の完全な一致という点からしても、⑬と⑭の原本はA本といえるが、そうすると少なくとも「別使」らの記事は重出となる。しかしそれは、⑬は最初の計画であったが、それが一部変更され、「別使」だけが⑭で豊璋の衛送使として出発したと考えれば解決される<sup>(29)</sup>。

A本とB本では豊璋出発の年次が異なる。しかしA本の性格からしても、またA本の年次が「世記」と一致することからしても、豊璋出発は⑭により、661年9月とすべきであろう。持統紀4年冬10月条、大伴部博麻への嘉詔に「於天豊財重日足姬天皇（齊明）七年（661）、救百済之役、汝為唐軍見虜」とあるのは、661年が正しいことを決定づける<sup>(30)</sup>。B本の年月は誤っているのであるが、比羅夫が豊璋に同行したことまでをも否定することはできない。比羅夫が百済に長期滞在して活躍したなら、B本を通じて書紀にいくらかは記事が残ったであろうが、そのような記事は皆無である。比羅夫は豊璋に同行し、豊璋推載を目撃し、かつ全般的情勢をさぐった後に直ちに帰国したのであろう。

⑯は倭軍の第二次派遣記事である。將軍名が列記されていることから、やはりA本によると考えられる。冠位名がないのは、その時の記録者の疏漏によるものであろう。

以上で、豊璋帰国とその後の経緯について記した原本はほぼ明らかになった。それに基づいてさらにそれ以前の記事、即ち百済滅亡と福信

らの厥起記事の原本について推考する。

⑰（齊明紀6年9月条—660）百済遣達率（分注。闕名）沙弥覚従等、来奏曰（分注。或本<sup>(1)</sup>云、逃来告難）、今年七月、新羅恃力作勢、不親於隣。引構唐人、傾覆百済。君臣絀俘、略無嘸類（分注。或本<sup>(2)</sup>云、今年七月十日、大唐蘇定方、率船師、軍干尾資之津。新羅王春秋智率兵馬、軍干怒受利之山。夾擊百済、相戰三日。陷我王城。同月十三日、始破王城。怒受利山、百済之東堺也）。於是、西部恩率鬼室福信、赫然發憤、擲任射岐山（分注。或本<sup>(3)</sup>云、北任鉸利山也）。達率余自進、拋中部久麻怒利城（分注。或本<sup>(4)</sup>云、都々岐留山）。各營一所、誘聚散卒。兵盡前役。故、以楛戰。新羅軍敗。百済奪其兵。既而百済兵翻銳。唐不敢入。福信等遂鳩集同国、共保王城。国人尊曰、佐平福信・佐平自進。唯福信起神武之權、興既亡之國。

⑱（同冬10月条）百済佐平鬼室福信、遣佐平貴智等、来献唐俘一百余人。今美濃国不破・片泉、二郡唐人等也。又乞師請救。并乞王子余豊璋曰（分注<sup>(5)</sup>。或本<sup>(6)</sup>云、佐平貴智・達率正珍也）、唐人率我螯賊、来蕩搖我疆場、覆我社稷、俘我君臣（分注<sup>(7)</sup>。百済王義慈、其妻恩古、其子隆等、其臣佐平千福・国弁成・孫登等、凡五十余、秋七月十三日・為蘇將軍所捉、而送去於唐国。蓋是、無故持兵之徵乎）。而百済国、遙頼天皇護念、更鳩集以成邦。方今謹願、迎百済国遣侍天朝王子豊璋、將為国主、云々。詔曰、（中略）。宣有司、具為与之、以礼發遣、云々（分注<sup>(8)</sup>。送王子豊璋及妻子、与其叔父忠勝等。其正發遣之時、見于七年。或本<sup>(9)</sup>云、天皇、立豊璋為王、立塞上為輔、而以礼發遣焉）。

⑰・⑱には分注が多く、そこには「或本」がしばしば引用されている。ここでまず注目されるのは、⑰の「或本」(三)と(四)である。これ

(29) 池内宏注(24)論文

(30) 森公章「朝鮮半島をめぐる唐と倭」（池田温編『唐

と日本』吉川弘文館、1992年）

は本文の固有名詞にたいする異伝であるから、本文原本と分注原本は別本であることがわかる。⑰は百濟滅亡と福信らの蜂起を伝えるが、それは豊璋帰国の前提となる記事である。そうするとその2本とは、該当する「世記」の記事は①に別にあるので、結局、A本とB本ということになる。B本の百濟滅亡記事は他に確認される(後述)ので、本文は基本的にA本、福信らに関する異伝である「或本」(三)と(四)はB本となる。百濟滅亡記事に関する「或本」(一)と(二)は、また別本のようにみえるが、そうではなくA本である。本文はA本の表現を変えるか、あるいは簡略化しながら抽象化した稿本の文であって、完成者は稿本とA本との異同を問題にして付注したのである。

⑱分注(a)の「或本」(五)もA本である。A本の「佐平貴智・達率正珍」を稿本が「佐平貴智等」と簡略化したのであって、このような稿本の人名簡略化は一般的に看取される。

⑲の分注(b)は傍線部分の本文に対応するが、その本文は具体的なA本記事を簡略：抽象化したのであって、本文は稿本の造文と考えられる。そしてその本文が漢籍を引用したものであることからすると、完成者がさらに手を加えたのであろう。分注(b)の文はA本と考えてよいが、ただ末尾の「蓋是、無故持兵之徵乎」は、夏五月是月条の「挙国百姓、無故持兵、往還於道」を念頭にしたもので、付注者の言葉である。

分注(c)は、主に豊璋らの出発が「七年(天智即位前紀9月)」記事にあるということ指摘するためのものである。しかし「送王子豊璋及妻子、与其叔父忠勝等」はなんらかの原本によることが確実で、それはまた「或本」(六)とはまた区別される。なぜならそれが「或本」(六)によるなら、それは「送王子豊璋及妻子、与弟塞上等」などとあるべきであるからである。

ところで、「詔曰」の内容は、「俱集沙喙」の語を除くと、大部分(中略部分)が漢籍の語を綴り合わせたもので、それは完成者の造文に過ぎない。そして末尾が「云々」で終わっていることからすると、本来の「詔曰」の内容は、まさに「送王子豊璋及妻子、与其叔父忠勝等」であったと考えられる。ところが豊璋らの発遣は「七年」のことであるので、それを「云々」とし、本来の本文記事をそのまま用いて、そのことを指摘しておいたといえる。「送王子」以下はA本によったのである。「或本」(六)はその異伝で、完成者がついでに付注したのであるが、「詔」の実際の内容が本文で抜けたこともあって、「或本」(六)の「以礼発遣焉」を参考にして、本文末尾を「宣有司、具為与之、以礼発遣、云々」ととり繕ったと考えられる。「或本」(六)はB本を指すのである。公的記録に基づくといえる孝徳紀白雉元年2月条には、「其弟塞城」とあり、「或本」(六)の「塞上」と異なることも参照される。

B本には別に百濟滅亡記事があった。

⑲(齊明紀4年是歲条-658)出雲国言、於北海浜、魚死而積。厚三尺許。其大如鮓、雀啄針鱗。々長数寸。俗言、雀入於海、化而為魚。名曰雀魚(分注。或本<sup>4)</sup>云、至庚申年(660)七月、百濟遣使奏言、大唐・新羅・并力伐我。既以義慈王・々后・太子、為虜而去。由是、国家、以兵士甲卒、陣西北畔。繕修城柵、斷塞山川之兆也)。

⑳(同条)西海使小花下阿曇連頼垂、自百濟還言、百濟伐新羅還、時馬自行道於寺金堂。晝夜勿息。唯食草時止(分注。或本<sup>4)</sup>云、至庚申年、為敵所滅之応也)。

⑲・⑳は相連続する記事である。⑳の本文は、『三国史記』義慈王紀15年(655)条に、「夏五月、驛馬入北岳烏含寺、鳴迦仏宇、数日死」、「八月、王与高句麗・靺鞨攻破新羅三十余城」

とほぼ同一事実を指しているの、それは阿曇連頼垂の百済での見聞である。その原本は分注所引の「或本」(八)であるが、それはとりも直さずB本なのである。⑳は本来、齊明紀3年(657)是歳条、「西海使小花下阿曇連頼垂・小山下津臣儷、自百済還、献駱駝一箇・驢二箇」に続くべき記事であるが、㉑本文を百済滅亡に関する予兆記事として、稿本が㉑の後に配置したのである。

㉑分注の「或本」(七)の内容は百済滅亡記事であるので、「或本」(七)もB本で、B本では㉑と㉒の順序が逆になっていたのである。㉑分注の「由是」以下の下線部分はB本の文か、付注者の文かが明確でない。B本に本文の雀魚記事があったなら、それはやはりB本の文ということになるが、㉑以下、「是歳」にかけられた「国」での予兆記事がいくつかみられ<sup>(31)</sup>、それらは阿曇氏家記にあったとは考えられないので、雀魚記事もB本のものではなく、従って下線部分は、雀魚を百済の滅亡及びそれに対する倭の防備の予兆と把握した、付注者の文とみるのが隠当である。

B本が㉑本文のような百済滅亡予兆記事をもっていたことからすると、

㉑(齊明紀6年5月是月条—660)挙国百姓、無故持兵、往還於道(分注。国老言、百済国失所之相乎)。

は、百済滅亡直前の予兆記事であるから、それは分注を含めてやはりB本によるものであろう。B本は百済滅亡予兆記事㉑・㉒、百済滅亡記事㉑分注、福信らの挙兵記事㉑分注、福信による

唐俘献上記事㉑分注、豊璋発遣記事㉑分注、「阿曇」比羅夫連の豊璋護送記事㉑をもっていたことになる。そして阿曇山背連羅夫は、翹岐(豊璋)来倭時に筑紫に派遣されており、また入京後に豊璋は「阿曇山背家」に安置されたから、豊璋来倭記事ももっていたことが確実である。

#### 4. 倭の出兵理由

百済滅亡から豊璋帰国に至る過程を記した原本は3本あった。1本は公的記録を整理したもので、その内容は基本的に正確である。余程の不都合がない限り、この1本によって事件の展開過程を追うべきである。他の1本の「世記」は、百済・高句麗の滅亡事情を比較的具体的に述べており、豊璋帰国後の動静を伝えるなど、補足的史料として重視されるが、主観的な思いこみも強く、一部には年次の誤りもある<sup>(32)</sup>。残りの1本の阿曇氏家記は、豊璋来倭年などの重要事実をも伝えているが、なかには潤色や誤りがあることを考慮しなければならない。

内外の史料を総合すると、事件は次のように展開した。660年7月に百済は滅亡するが、8月には既に鬼室福信や道琛らは任存城に拠って3万の兵を糾合し、唐軍の攻撃を撃退した。その他にも久麻那利城や南岑城・貞峴城・豆尸原嶽の各地で遺民が蜂起している(『三国史記』太宗武烈王紀7年8月2日条)。百済滅亡とこれらの遺民の戦いの報が最初に届いたのは9月5日である。この時点では、豊璋帰国や救軍の

(31) 齊明紀5年是歳条「命出雲国造(分注。闕名)、修嚴神之宮。狐嚙断於宇郡役丁所執葛木末而去。又狗嚙置死人手臂於言屋社(分注。此云伊浮耶。天子崩兆)は、齊明死去の予兆、齊明紀6年是歳条「欲為百済將伐新羅。乃勅駿河国、造船。已訖。挽至績麻郊之時、其船夜中無故艫舳相反。衆知終敗。科野国言。蠅群向

西飛隴巨坂。六十圍許。高至蒼天、或知救軍敗績之恠」は、白村江の敗戦の予兆である。

(32) 660年の唐俘記事を661年としている(齊明紀7年11月条分注)こと、665年の蓋金の死を664年としていること(天智紀3年冬10月是月条)などである。

要請はまだなかった。

9月3日、唐将蘇定方が部将劉仁願の唐兵1万を泗泚城に、新羅兵7千を熊津城の守備にあてて帰国すると、23日、百濟兵は泗泚城を襲ってその外柵にまで突入した。これから勢いをえた百濟遺民の、各地に挙兵するものは20余城に及んだのである。福信が唐俘100余人を献上し、あわせて救軍と豊璋帰国を要請したのは10月であるが、それはおそらく蘇定方の帰国と関連するのであろう。この時点で百濟復興の展望が開けていたのである。

泗泚城の唐軍は軍勢も少なく、孤立していた。その唐軍を救うため、新羅の太宗武烈王は10月に自ら出兵しているが、その後も新羅による救援と軍糧の補給なくしては、唐軍は生存自体が不可能な状態にあったのである。即ち、百濟復興の最大の障害は新羅にあったのである。10月の福信の要請を受けた斉明は、直ちに軍備を備え、その年の12月には難波宮へ入り、翌年の正月には西征の途についている。そこで看過できないのは、斉明紀6年冬10月条の詔にみえる「俱集沙喙」と同年は歳条「欲為百濟、将伐新羅、乃勒駿河国造船」の「新羅」である。これによると倭政権は新羅攻撃を意図していたのであって、それは福信の戦略的要請によるものとしてよい。情勢の有利な展開により、倭政権も百濟復興を確信しえたのである<sup>(33)</sup>。倭は唐・新羅軍事同盟に組せず、高句麗・百濟との関係を重視していた。ところが百濟はあっけなく滅亡したので、唐・新羅軍の倭侵攻を予測せざるをえなかった。時おりしも、百濟復興にとって

決定的に有利な局面が到来した。新羅さえ唐軍を救援しなければ事足りたのである。この判断こそ、倭軍出兵の最大の理由としなければならないであろう。

661年初、唐から劉仁軌軍が新たに到着し、新羅軍と共同して周留城を攻撃した。劉仁軌軍は周留城攻撃には失敗したが、3月には百濟軍の泗泚城包囲を解くことには成功している。4月の福信による再度の豊璋帰国要請（「世記」）は、このような情勢のなかでおこなわれたのである。倭政権は8月になってようやく三軍からなる遠征軍と豊璋護送の任に当たる「別使」の編成を終えた。しかし急拠、計画が変更され、豊璋とその護送軍5千余人だけが百濟に発遣された。計画の変更は、同年7月、唐軍が高句麗平壤城を包囲し、8月には新羅軍も北上したという、その情報が入ったからであろう。倭軍が新羅を攻撃せずとも、百濟復興軍さえ強化されれば成功しうると判断したと考えられる。これは当時の有利な情勢を最大限に利用しなかった戦略的誤謬であったが、倭政権としては、まだ本格的出兵には躊躇があったからと思われる。しかし豊璋護送軍の派遣によって、倭は高句麗・百濟軍事同盟に実際に関わることとなり、後はそれと運命を共にすることを余儀なくされたのである。

豊璋帰国後の情勢は、唐・新羅の鋒先が高句麗に向けられていたので、泗泚城・熊津城奪回のまたとない機会に恵まれていた。しかし新羅は北上しながらも、9月には百濟軍を破って、泗泚城・熊津城にひき続いて軍糧を供給し続け

(33) 田村円澄『大宰府探究』（吉川弘文館、1990年、38～39ページ）は、「斉明政府が百濟救援に乗り出したのは、第一に、百濟の使者が伝えた戦況報告によれば、新羅軍は百濟軍に較べて劣勢であるのみならず、唐軍の介入は消極的であった。したがって日本の軍事救援により、百濟の復興は可能である。と判断されたから

である。あるいは「中大兄皇子には、百濟の軍事援助に踏み切った場合、戦闘の相手は新羅である、と考えられた。新羅軍に勝利すれば、百濟の復興、そして〈任那〉の貢納体制の再興は容易である」とする。「任那の貢納体制」部分を除けば、継承すべき視点であると考えられる。



た。そうこうするうちに662年2月、唐軍は平壤から撤退し、新羅軍も帰還したのである。

662年にも戦闘は続いたが、復興軍は最後まで唐軍と新羅軍の連けいを絶つことができなかった。そこで長期戦に備えてか、復興軍は避城(金堤)に本拠地を遷したが、663年2月、新羅は百済の居烈城・居勿城・沙平城を陥し、さらに徳安城(忠南恩津)に至った。戦況は百済に不利に転換していったのであり、そのため百済軍は拠点を再び周留城に遷すことになった。倭の本格的な出兵はこのような状況下で行われた。3月、前・中・後の2万7千人からなる遠征軍が編成され(⑩の天智紀2年3月条)だが、その第一の攻撃目標は新羅であった(「打新羅」)、天智紀2年6月条「前將軍上毛野君稚子等、取新羅沙鼻岐奴江二城」によれば、前軍は6月に新羅の2城を奪取している。同じ頃の5月、犬上君が兵事を高句麗に告げて石城に還り、豊璋と会った(「世記」の⑨)のはこれに関連する。ここに高句麗・百済・倭3国の直接の軍事的連けいが成立したのである。

同じ頃、唐も泗泚城軍を本格的に救援し始めた。孫仁師の率いる唐軍7千が5月に徳物島に到着、陸路を通じて泗泚城に入った。『旧唐書』百済伝に、孫仁師到着記事の後に「(扶餘豊)遣使往高麗及倭国、請兵以拒官軍、孫仁師中路迎撃、破之」とあるのは、孫仁師来着を受けて豊璋が高句麗と倭に支援を要請し、高句麗軍が中路で孫仁師軍を攻撃したことを示す。その頃、

倭の中軍・後軍はまだ筑紫にあって情勢の推移を窺っていたと考えられる。豊璋の要請を受けた2軍の「健兒万余」(天智紀2年秋8月条)が白村江に到着したのは8月27日である。ここに倭軍は百済軍とともに、唐・新羅軍と正面から対決することになったが、その際、倭政権は高句麗との軍事的盟約に大きな期待をかけていたと思われる。

7世紀中葉、東アジアは唐・新羅同盟と高句麗・百済同盟が対決する状態にあった。倭はそれに積極的に関与する意志はなかったが、伝統的に友好関係のあった百済を重視していたので、新羅に見限られ、客観的には百済・高句麗同盟の立場に立たされることになった。660年に百済が滅亡すると、唐・新羅の倭侵攻という事態をも想定されることになったのである。倭の出兵を主に唐の脅威からの防衛戦とみる見解もあるが<sup>(34)</sup>、それは唐・新羅の脅威といわなければならない<sup>(35)</sup>。しかし倭の出兵理由はそれだけではない。百済復興軍が各地で挙兵し、1万余にしかならない唐軍を完全に包囲したので、百済復興が現実のものとなりつつあったことも関係するのである。ここで倭が新羅に泗泚城・熊津城の救援の暇さえ与えなければ、それは必ずや成功すると確信したからなのである。

また最終的に百済戦線に2万程の軍勢を出兵したのは、のっぴきらなぬ事情に陥っていたとはいえ、百済復興軍の力量と対高句麗同盟にたいする過大評価があったからであろう。確かに

(34) 井上光貞『日本の歴史3・飛鳥の朝廷』(小学館、1974年、376ページ)、山尾幸久「大化前後の東アジアの情勢と日本の政局」(『日本歴史』229、1967年)

(35) 渡辺正気「神籠石の築造年代」(『齊藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中、吉川弘文館、1988年)は、齊明紀4年(是歳)条注にみえる、「由是、国家、以兵士甲卒、陣西北畔。繕修城柵、斷塞山川之兆也」を、北九州の神籠石9城築造記事とみて、それ

を齊明7年のこととし、「百済滅亡直後の、唐・新羅連合国のわが国への侵犯を予想しての防備で」とする。注目すべき見解であるが、上記の文は天智期の朝鮮式山城築造記事ともとれる余地がなおあり、断案とはなしがたい。西谷正「朝鮮式山城」(『日本通史』3、岩波書店、1994年)は、「神籠石式と朝鮮式の山城が年代的に接近もしくは連続する」として、渡辺説を支持している。

百濟復興軍にはそれだけの力量があったのであるが、6月には豊璋が福信を殺害する（天智紀2年6月条）など、百濟軍は分裂したばかりか、有能な指揮官を欠いた。高句麗も期待した程には動かなかったのである。

倭の出兵については、倭の「帝国主義戦争」とみる見解や<sup>(36)</sup>、倭が「百濟・新羅に対してもっていた貢納関係を、危険な軍事的出兵をもおして維持しようとした」<sup>(37)</sup>、あるいは「倭の五王以来、朝鮮の諸国王の上に君臨してきた流れのなかで、百濟王を従えて唐と戦った」<sup>(38)</sup>などとする見解がある。いずれも前史を含めて、関係史料の史料批判が不充分なところに出るものといえるが、それはまた倭軍にたいする過大評価にも基因していると思われる。

義慈王降服後も、任存城に拠っていた百濟軍は3万を越え、それに呼応するものは20余城に達したという（『旧唐書』黒齒常之伝では200余城）。これらの遺民たちこそ百濟復興の主役で

あったことはいうまでもない。

任存城の勢力は後に周留城に遷ったのであるが<sup>(39)</sup>、その兵力は、戦闘での犠牲もあったとはいえ、補充もされたのであろうから、いつも3万を下ることはなかったと考えられる。

周留城と各地の遺民の挙兵があり、1万にしかならない唐軍と7千の新羅軍が孤立状態にあったからこそ、倭は情勢有利とみて豊璋を5千の軍で護送したのであるが、その倭軍は全体から見ると極く補助的なものにしか過ぎなかったとしてよい。

最終的に倭は白村江にまた「万余」の水軍を投入した。しかしそれも補助的なものといわざるをえない。なぜなら両軍の主力は双方数万に達した陸軍<sup>(40)</sup>であって、双方万余の水軍ではなかったからである<sup>(41)</sup>。ところが唐軍には多くの兵船があり、それによって輸送力、機動力が倍加されていたのにたいし、復興軍にはそれがなかった。倭軍はこの唐の水軍に対抗するた

(36) 石母田正「古代における〈帝国主義について〉」（『歴史評論』265、1972年）、鄭孝雲「天智朝と〈百濟の役〉」（『韓』116、1989年）。鄭氏は倭の出兵は「新羅征伐」を目的とする倭独自の「帝国主義的」戦争であったとするが、既述のように、倭の新羅攻撃は福信との間で決定された戦略的方針によるものとするのが妥当である。後述のように、2～3万の兵力でどうして「帝国主義的」戦争ができるのか、極めて疑問とすべきである。

(37) 鬼頭清明注(19)論文

(38) 坂元義種「東アジアの国際関係」（『日本通史』2、岩波書店、1993年）

(39) 池内宏注(24)論文

(40) 新羅軍は文武王親率下に28将軍が出動した。王親率であるから、それは百濟滅亡時に金庾信の率いた5万の兵と対比される。唐軍は孫仁師と劉仁願が指揮したが、孫仁師は7千人を率いて来援したから、唐の陸軍は合わせて2万近くになっていたはずである。

(41) 唐の兵船は「一百七十艘」（天智紀2年秋8月条）であった。654年の唐の高句麗遠征では、水軍が「勁卒四万、戦船五百艘」（『旧唐書』高麗伝）とされたから、1船に80人ということになる。その計算で「一百

七十艘」は13600人である。一方、倭軍は「四百艘」で「万余」であるから、1船の人数は25～50人、また㊸・㊹を同一事とみなすと、「軍五千余」、「船師一百艘」となるから、1艘当たり30～40人となる。欽明紀15年春正月条の朝鮮派遣軍は「助軍数一千・馬一百匹・船卅隻」であるから、それは1隻当たり25人と馬2～3匹である。当時の倭の兵船は40人程度が乗員の限度ということであろう。孝徳白雉4年（630）の第二次遣唐使は、一艘に120人が乗ったが、これは当時としては外航用の例外的なものである。村尾次郎「白村江の戦」（『軍事史学』25、1971年）は、天平宝字5年（761）の新羅遠征計画の際の平均数字、即ち船一艘につき水手44人、兵員約100人強を参考にして考察するが、それは適当ではない。ともかく兵船数は異なっても、唐・倭の水軍兵員は同程度とみてよい。唐の水軍は劉仁軌が本国から率いてきた兵員が基本と考えられるが、水軍の別将として杜爽、扶余豊が確認されることからすると、それには新たな増遣軍も加わっている可能性もある。また数字的なことでは、『三国史記』文武王紀3年秋5月条に、「孫仁師率兵四十万」、同11年秋7月26日条、文武王報書に「倭船千艘」などともあるが、これらの数字はとらない。

めに要請されたとみてよく、ただの万余の兵力なら、その後も健在であった加林城や任存城や、その他近在の城に助勢を頼めばすむことであった。倭は唐の水軍を封ずるための、復興軍の補助的兵力であったのである。

倭は結局、前後2回にわたって3万2千の兵を渡海、出兵したことになるが、それはおそらく当時の倭の限界を示すであろう。新羅一国にしても、少なくとも5万の遠征軍を組織しえたとし、防衛戦となれば数十万の動員も可能であったであろうから、それだけの兵力を以てして、どうして倭が「帝国主義的」戦争をしかけることができるのか、ましてや渡海という条件の下である。それは机上の空論というべきものであろう。

### おわりに

義慈王子の豊璋は643年来倭した。それは本国での左遷という要素もあったが、642年の百済の大勝をさらに拡大するため、倭に旧任那加羅出兵を働きかけるのが目的であったと考えられる。しかし当時の倭にはその意思がなく、豊璋の目的は達成されなかった。倭は百済との伝統的な関係をなによりも重視していたが、唐や新羅とも友好関係にあり、旧任那加羅問題で事を構える必要もなかったのである。客観的な国勢情勢は、倭に唐・新羅側に立つか、高句麗・百済側に立つかを迫っていたが、倭は後者を重視しながらも、その外交路線を鮮明にすることはなかった。

ところが一転、百済が滅亡すると、倭は唐・新羅軍の来攻という事態をも考えざるをえなく

なった。折しも、百済遺民が広範に挙兵し、百済復興の明るい展望が開かれた。新羅を牽制さえすれば、それは可能だと考えられたのである。ここに倭がその外交路線を鮮明にし、出兵した理由があったといえる。

豊璋出発関係記事には、「天皇、立豊璋為王、立塞上為輔」(⑬の分注所引「或本」)、「宣勅、以豊璋等使継位」(⑭)などの記事もあるが、それは阿曇氏家記によるもので、潤色があるのである。それが事実としても福信らが豊璋の帰国を要請したのは、豊璋を推載するためであったから、倭王がそれを追認したということに過ぎない。また「以織冠、授於百済王子豊璋」(⑮)という記事もあって、豊璋が倭王の臣下として位置づけられたとも解されるが、それは豊璋が18年間も倭に滞在し、「百済君」という客分ではあるが、倭王に「侍」したという、特殊な関係に由来するものであって、それ以前の百済・倭間の国家関係を反映したものではない。

661年9月、豊璋は倭を発ち、年末までには周留城に入って推載された。ここに百済復興の条件は整ったのであるが、復興軍の戦略的誤謬もあって、事はそう運ばなかった。豊璋は軍事的才能がないばかりか、人心の収攬にも失敗して福信を殺害した。663年8月28日、白村江戦で敗れるや、豊璋は周留城をも捨て高句麗に逃れた。9月7日に周留城が簡単に陥落した(天智紀2年条)のは、指導部の欠如によるところが大きい。激動期の主人公としては、豊璋の器は大きくなかったのであるが、それは豊璋自身の悲劇であり、またその悲劇は、その後の東アジア史の動向に少なからぬ影響を与えたのである。

